

喫茶店
文芸
2021
12月
月号

今月のお題
プレゼント



喫茶店文芸 2021年1月号——目次

ほろほろほろろ

祝福 1

天野満

天野日記 8

氷川省吾

トゥマーン (Vol.1) 11

ほろほろほろろ

祝福



籠に囚われた虫が辿る道は二つ。自由と思考を奪われ、ただ餌を食ふことしかできない生き物として死ぬまで飼ひ殺されるか。或いは利用されるだけ利用され、その身から価値を絞り尽くされた後に無残に捨てられるか。人間は虫に対して情なんてものを持ち合わせることはなく、ただの消耗品として扱っただけなのです。

一つの虫が潰れても代わりはいくらでも用意されます。次から次へと新しい虫が補充されて、人の勝手でその一生が際限なく消費されていく。言葉を持たない虫たちは人間の行いに意見をしません。もしかすると彼らは、これから訪れる残酷な未来について理解すらしていないのかもしれない。ですが彼女は虫じゃない。自我を持ち、言葉を持ち、心を持った人間なのです。故に彼女は、自分に降りかかる呪いを、悲惨な己の顛末を理解していたはずなのです。

そんな彼女は自分の人生に何を思うのでしょうか。あの方のために、私は一体何ができるのでしょうか。

お屋敷の立つ丘から麓まで降りますと、街の賑やかな喧騒が聞こえてきます。飛び交う笑い声や活気のある市場の雰囲気、そして新雪を踏みしめて遊ぶ子供たち。雪化粧をした真冬の景色は、温かな空気に包まれていました。その光景を眺めていると、私もつられて胸の奥が温まるような気がします。道端で立ち止まり大きく息を吐けば、白く濁った空気が静かな風に掻き消えました。

荷台を引いた犬を従え、再び歩き出します。目的地は街の中心

部に立ち並ぶ商店街、その一面に建つ大きな生地屋さんです。今日は買い物のために街まで赴いたわけではありません。今日は月に一度の取引の日、つまりは商売です。

冬の只中でも人の行き交いは活発です。明け方までは積もっていたであろう路上の雪は、道行く人々に踏まれてすっかり溶けています。そのお陰で歩きやすくはありますが、犬と荷台を連れた私にとって、人混みに足を踏み入れるのは億劫なものです。しかし街の人々は優しい方ばかり。すれ違えば私たちに笑顔を向け、顔見知りの方は挨拶をくれました。

「あら、お屋敷のメイドちゃん。今月も遠くからご苦労さまねえ。すっかり冷えたでしょう。あったかいココアでも飲んでいくかい？」

「おばさん、おはようございます。すみません、これから少し用事があるので。お気持ちだけいただきます」

「あら、そうだったわねえ。まだ若いのによく働いて偉いよまったく。うちの息子も見習ってほしいくらいだよ。ああ、引き留めて悪かったね」

そんな他愛無い会話を数回挟む頃には、目的の生地屋さんに到着していました。

荷台を外に停め、番は犬に任せて私は店内へ。ドアベルの音と共に中へ入ると、店主のおじさんが待ってましたというように立ち上がりました。

「お！ いらっしゃい、お嬢ちゃん。今月分かい？」

「はい、今から運び入れても大丈夫ですか？」

「勿論だ。いつもどこへ運んでくれ」

私は荷台へ戻り、布で包まれた荷物を店内へ運んでいきます。量が多く、一人で行うには中々の重労働です。十分ほどかけてようやく全てを運び終えることができました。

「ご苦労さん。それじゃ、中身を確認させてもらおうよ」

お願いします、と頭を下げると、おじさんは包みを一つ机に乗せ、結び目を解きました。

目の前に現れたのは、清く透き通るような白銀の生地でした。おじさんが持ち上げて広げてみせると、動きに合わせて端が靡き、眩い光を散らします。まるで月光を織り込んで作られたような幻想的な輝きに、おじさんは溜め息を漏らしました。

「美しい……」

おじさんは生地を裏返してみたり、天井の明かりに透かしてみたり。そしてもう一度大きく息をついて私に向き直りました。

「何度見ても信じられんほどの美しさ、神々しさのあまり鳥肌が立つくらいだ。東の国から輸入されるシルクが生地の最高峰だと言われるが、この街に關しちゃそれは違う。お屋敷で作るこの生地が文句なしで一番よ。繊細で優美、滑らかな肌触り、まるで祝福そのものさ。女神様の纏うといわれる羽衣は、きっとこの生地から作られてるんだらうよ」

祝福、おじさんはあの生地をそう表しました。何も知らない人の目にはそう映るのでしょう。私も、このような立場でなければ同じことを思っただけです。街中で目に入れば思わず足を止め、その魅力を延々と愛でたい気持ちになりますと思います。

「よしっ！ お代はこれで問題ないかい？」

検品が終わったところで、おじさんから金貨の詰まった袋をい

いただきました。枚数を数えてみると、先月より一割ほど多く入っています。おじさんの顔を見上げると、

「ここ最近景気が良くてな。お屋敷はお得意様だし、来月から頼むよってことで」

来月からも、これからもずっと。

「はい、ありがとうございます」

顔を伏せて袋の口を握りしめたまま、もどかしい気持ちが胸の中で渦巻いていました。

取引はこれでお終いです。お屋敷へ帰ろうとドアノブを握ったところで、ふとおじさんが口を開きました。

「それにしても不思議なもんだよなあ、この生地は。一体何から作られてんのかねえ」

ノブに手をかけたまま腕が固まり、肩越しに後ろを振り向きま

す。おじさんはにかつと歯を見せて笑っていました。

「なあに、単に思ったことを口にしただけさ。本当に知りたいなんて思っちゃいないよ。他のやつらがこれを作るようになったら、折角のうちの看板商品があつという間に値崩れさ。これから末永く、この祝福にあずかろうじゃない」

一瞬、心が揺らぎました。ここで全てを吐き出したなら、もしかすると何か変わるのではないかと。ですが結局、その決断に踏み切ることはできませんでした。

「ええ、今後ともよろしくお願いしますね」

最後は軽薄な笑顔を残し、店を後にしたのです。

取引を終え、お屋敷へ戻る帰り道。街から離れるにつれて次第

に賑わいが遠ざかります。お屋敷は林を抜けた先の小高い丘の上に建っています。そこまでの道は深い雪に覆われ、一步一步が重く感じます。長い道のりの中、頭の中に反響するのは生地屋さんのおじさんの言葉。

「祝福……」

違いますよ。あれは皆さんが思うような高潔なものなどではありません。

あれは深い深い人の罪。凝縮された醜い呪いの結晶なのです。

私がお屋敷に連れてこられたのは、まだ物心ついて間もない頃だったと思います。どこで生まれ、両親が誰なのかは一切覚えていません。ただ事実として、私に愛情を注いでくれる両親はおらず、身を寄せられる場所はこのお屋敷のみでした。そんな私が旦那様から仰せつかったお仕事は、使用人としてお嬢様のお世話をすることでした。

当時の私は無論礼儀や作法を知りません。そんな状態ではとても使用人として使えたものではありませんので、一人前の使用人となるため、厳しい指導の日々が続きました。所作や言葉使いから始まり、お屋敷内での決まり事、給仕の方法、使用人としての考え方や心構え、その他諸々を未熟な頭に叩き込んだのです。

中でも旦那様が特に力を入れて教育してくださったのは、機織りの技術でした。これは我が家の生業であり、この技術を習得できなければお嬢様の使用人として使っていただけないとのこと。

お屋敷から放り出されてしまえば最後、私に行く当てはありません。当時の私にとってこのお屋敷は、いいえ、いつか仕えるであろうお嬢様こそが、私にとって頼りの全てだったのです。そのために必死になって技術を学び、自分の物とし、遂に旦那様に認めていただけたのです。

そうしてようやく、私はお嬢様の使用人となることができました。

『初めまして！ あなたが私のメイドさんね？ 未永く仲良くしてちょうだい』

当時の眩しく澁刺とした笑顔を良く覚えています。まだお互い十歳の頃。世の中のことを何も知らず、ただの無力で純粋な子供だった日のことでした。

お屋敷へ戻る道すがら懐かしい思い出に浸っていたからでしょうか、お屋敷へ帰り着く頃には昼の十二時を過ぎていました。私は急いで昼食の用意をし、お嬢様の待つお部屋へ向かいます。お部屋はお屋敷の最奥に位置しているのですが、お屋敷は奥へ進むほど闇は密度を増し、空気はどんどん重く息苦しくなります。奥へ進む者を拒むようなこの雰囲気、私は甚く嫌いでした。

やがて私は一つの部屋へたどり着きます。この屋敷の中で最も位の高いものの一つ。豪華に飾り付けられたドアは重く、私は息を止め、体重を乗せるようにドアを押し開けました。

日光の届かない屋敷の最奥。漆黒で塗り潰された部屋の中で、仄かな光が揺らぎます。蠟燭の灯などではありません。それは一人の人間の髪から溢れているのです。

彼女はソファに腰掛け、力なく背凭れに体を預けています。体の何倍にも長く伸びた銀の髪を無造作に垂らし、絨毯に触れることすら気にかけません。蛇のように床を這うその髪は、祝福と称されたあの生地と同じ光を惜しげもなく振りまいていました。私の存在に気付かれたのか、光の持ち主はゆっくり首を回して瞳をこちらへ向けました。

「お待たせしてすみません、お嬢様。昼食をお持ちしました」
「ああ、ありがとう」

深く一礼すると、お嬢様は頼りない微笑みを零しました。彼女のお傍へ歩み寄ると、照らし出されたお顔が良く見えてきます。白くこけた頬と落ち窪んだ目元。虚ろな瞳からは生気が感じられず、言葉を紡ぐ唇は荒れ、青ざめています。以前の澁刺とした少女の面影は微塵も感じられません。今のお嬢様を見ていると、心臓を強く握られるように苦しくなるのです。

胸の痛みにじっと耐えながら、お食事を彼女の口許まで運びます。食事と言いましても豪華なものではなく、味の薄く消化しやすいスープのようなものです。それをスプーンで掬い、お嬢様の唇へと差し出しますが、彼女は口を開くの躊躇いました。どうされたのか尋ねますと、彼女は弱気な目をして顔を逸らしました。「ごめんなさい、少し体調が優れなくて、食欲もないの」

私の視線がふいに下がり、彼女の首元へ向かいました。白い肌には青い血管が透けて見え、薄い皮越しに鎖骨が浮いています。健康とは程遠い状態の彼女に対し、食事を下げるなどできるはずありません。

「で、ですがお嬢様、お食事を召し上がらなければ、お体も良く

なりません。少しでも構いませので、どうかお召し上がりください」

「……そうね、わたしにはまだ、やるべきことがあるものね」
私は己の失言に気付き、深く後悔しました。お嬢様自身お辛いはずなのに、私はその苦痛を暗に強要してしまったのです。

唇を引き結びながらスープを彼女の口へ運びます。一口ずつ時間を掛け、味の無い液体をゆっくり飲み下してゆくのです。私のことを気にかけてくださっているのか時々申し訳なさそうに眉を下げるので、その度に胸の痛みが増すのです。

私とお嬢様の間に会話はありません。振り子時計の音だけが暗い室内に響いていました。

お食事を終えた後も、お嬢様は体調が優れない様子でした。未だ後悔が後を引き、「ありがとう、美味しかったわ」と仰るお嬢様のお顔をまともに見ることができませんでした。

「それじゃあ」

お嬢様は細枝のような腕を持ち上げ、後ろ髪へ手を添えます。

「次はこちらをお願い」

「畏まりました」

食器を下げ、彼女の背後へ回ります。そこにあるのは一台の機械。椅子に腰を落とし、作業の準備を始めます。

「どう？ 今日ちゃんと伸びてる？ 自分じゃ確認できなくて」

お嬢様の不安そうな口調。気付けば奥歯を噛み締めていました。「ご安心ください。ちゃんと伸びています。今日も大変美しい御髪ですよ」

「そう、良かった」

安心されたからか、お嬢様はそれきり口を開きませんでした。

静謐に満ちた空間に、機織りの単調なリズムが響きます。用いる糸はウールやリネン、シルクなどの一般的なものではありません。お嬢様の長く伸びた髪を織り込んでいくのです。白く、細く、清らかな一本一本の髪が緻密に重なり、やがて一枚の生地となる。この世のどの生地よりも美しく、そして価値のあるもの。人々はこれを祝福などと呼びますが、一体これのどこに祝福があるというのでしょうか。

私は知っています。まだ髪が黒く、お嬢様が活気に満ち溢れていたあの頃を。

当時からお嬢様は美しく聡明で、気高く、そして私の言葉にも耳を傾けられるお優しい方でした。そんな彼女とこれまで数多くの体験を共有し、喜びを分かち合ってきました。身分の差はありますが、家族を持たない私にとって、お嬢様は姉のような存在だったのです。

幸せでした。お嬢様のお世話をし、ご命令を聞き、彼女の為となれることが。今思えば、この時の幸福こそが天から授かった祝福だったのかもしれませんが。そして、当時の私は子供でした。この幸せが一時のものではなく、永遠に続いていくものだと思じて疑わなかったのです。

私たちに転機が訪れたのは、お嬢様の使用人になってから二年後のことでした。それまで美しい黒色だったお嬢様の髪から次第に色が抜け始め、光を放つ銀髪となったのです。『綺麗でしょ』

と自慢げに髪を靡かせる彼女に対し、私は尋ねずにはいられませんでした。

『お嬢様、その髪はどうされたのですか？』

『お父様がね、私を一人前のレディとして認めてくださったの。私だってもう十二だものね。そのお祝いとして、この髪をいただいたのよ』

お嬢様の言葉の意味を当時は理解できず、私も初めは彼女の銀髪を賞賛しておりました。ですがこれが呪いの始まりであることに、やがて気づくことになるのです。

黒髪の頃は、散髪は月に一度の頻度で行っていました。ですが銀髪となった途端、髪の伸びる速さが尋常ではなくなったのです。初めは一日に十センチ程度伸び、一週間後には日に五十センチは伸びるようになりました。それから髪は伸びる速さは増してゆき、一月も経つ頃には日に五メートル以上伸びるようになったのです。戸惑う私に対して、旦那様はこう仰いました。お嬢様の髪を織り込んで生地を作れ、と。このお屋敷の生業が機織りであることの意味を、ようやく理解できた瞬間でした。

その日から私は機織り機を与えられ、お嬢様は屋敷の最奥に閉じ込められ自由を奪われました。一筋の光すら届かない屋敷の最奥に囚われたにも関わらず、お嬢様は将来に悲観することはありませんでした。その理由について一度だけ訊ねたことがあります。お嬢様はただ一言『それが、私の生きる意味だもの』とだけ返したのです。

時間が流れていきました。日射しの感触や風の香りに変化を感じることで季節の移ろいを実感できる私と違い、お嬢様はどうで

しょう。あの部屋から出ることは叶わず、どれだけの時間が過ぎたか知る由はないのです。お嬢様の感じた一年間は私の感覚より遙かに長いものだったでしょう。

お嬢様はすっかりやつれてしまわれました。初めは軽い運動などされておりましたが、今では腕を動かす気力すら湧かないように、一日中ソファの上でぐったりとされています。それでもなお髪は美しく伸び続けます。お嬢様から血肉を吸い上げ、まるで寄生虫か何かのように成長し続けるのです。

彼女の痛々しいお姿は見るに堪えません。もう伸びないでほしい、お嬢様を苦しませないでほしい。叶わない願いを唱え続ける日々が続きました。

全てはあの日から始まった呪いのせいなのです。あの銀の髪は決して祝福などではありません。そう呼ぶことなどあってはならないのです。あれは醜悪なる呪い。お嬢様の体を蝕み殺す、唾棄すべき人の業なのですから。

本来であれば今頃、彼女は美しく気高いご令嬢となられるはずでした。私が誇り、彼女自身もご自分に胸を張れる、そんなお方になられるはずだったのです。しかし現実はどうでしょう。目も当てられないほどやせ細り、今や気力や生気が微塵も感じられませんが。全てはこの髪が悪いのです。お嬢様の全てを吸い尽くし醜く成長し続けるこの髪が、私は憎くて堪らないのです。そして私は何よりも悔しいのは、お嬢様自身がこの現状を受け入れていること。お嬢様が弱音の一つでも零してくださるなら、私は彼女のため、誰を相手にしても立ち向かう勇気があるというのに。

「あのね」

機を織る手がびたりと止まりました。顔を上げますと、こちらを振り向こうとしたのか、お嬢様の頭が少し傾いていました。

「わたし、今度結婚するの」

「……え……？」

私は自分の耳を疑いました。結婚と、彼女は仰ったのでしょうか。だとしたら前後の文脈が全く掴めません。頭が混乱して言葉を見つけられずにいると、お嬢様は蚊の鳴くような声で続けました。

「わたしも、ほら、そろそろいい年だから。お相手は三つ上の方で、良家の生まれだそうよ。とてもしっかりした方で——」

「おお待ちくださいお嬢様！ け、結婚なんて、あまりにも急なお話じゃないですか！ どうしてそんな——」

「昨日ね、お姉様が亡くなったらしいの。子供は、一人しか、産めなかったって。あなたが外へ出ている間にお父様と話したのだけれど、お父様、とても悲しそうにしてた」

旦那様が、どうしたと言うのですか。体を蝕まれた現状も、望まぬ結婚も、全て旦那様のために受け入れるとも言うつもりなのですか。そのようなこと、到底受け入れられるはずがありません。お嬢様、貴女はただ都合の良いように利用されているだけなのだと、ご自分の状況から理解できるはずですよ。お姉様が亡くなられたと仰いましたが、何故葬儀に呼ばれていないのですか。身内の死を口頭で伝えるだけなんておかしいじゃないですか。

きつとお姉様は無残に捨てられたのです。利用されるだけ利用され、呪いの髪に体の全てを吸い尽くされたのです。このような

扱い、とても人間に対するものではありません。ただの家畜、いえ、虫も同然です。その扱いを実の娘にするという異常性をお嬢様はご理解されていないのですか？ でなければ、血の繋がりなどという軽薄な理由一つで、ここまで自分を犠牲にすることなどできるはずがありません。

「子供は何人がいいかしら。わたしは三人姉妹だから、それ以上は欲しいわ。頑張れるかしら」

お嬢様がご自分のお腹をさすり、浮ついた口調で笑いました。もう何年も見ていない彼女の嬉しそうな様子に、嫌悪が喉奥からせり上がるのを感じました。

お嬢様はきつと、壊れてしまったのです。とうの昔から、ひよつとすると、この家に生まれた時から。お嬢様は身も心もすっかり手放し、今では籠の中の虫として生きることを望まれています。このような無様な主をどのように誇れというのでしょうか。

……いえ、それは違いますね。私自身が手放したのです。かつての私が誇り、愛し、尊敬した主を。私が自らの意思で行動を起こしたならば、旦那様からお嬢様を守ることができたかもしれません。もしかすると、行動次第でこの忌まわしい呪いを断つことも叶ったかもしれないのに。

過ぎた時間は戻らない。失ったものは帰らない。これまで取り零してきたものを今更必死になって掻き集めても、出来上がるのは歪で醜い後悔だけ。

お嬢様の生き様を虫と例えるならば、結局は私もお嬢様と同じなのだと思付きました。お嬢様が旦那様の言葉に従うように、私も主の言葉に従うだけで、疑いを抱いても行動することを知らな

かった。自ら動き欲しいものに手を伸ばさなかった私は、一生地面を這いつくばる芋虫も同然なのです。

お嬢様、やっと理解することができました。貴女のために何ができるのか。ようやく自ら考え、答えを見つけることができたのです。

目蓋を閉じ思い浮かべるのは、眩しく輝き、高貴で、私が祝福するかつてのお嬢様の姿。これ以上彼女の尊厳を踏みにじる行為を見過ごすことなどできません。

静かに立ち上がり、お嬢様へ背後から歩み寄ります。途中、テーブルに置かれた散髪用のハサミを取って。

ソファを挟んでお嬢様の背後に立ち、左手で白い頬へ触れます。しんと冷えた感触。お嬢様がのそりと顔を上げ、私と目が合いました。

「ふふふ、あなたも、わたしたちの結婚と子供のこと、祝福してくれるでしょう？ これまでもそうだったように」

「いいえ」

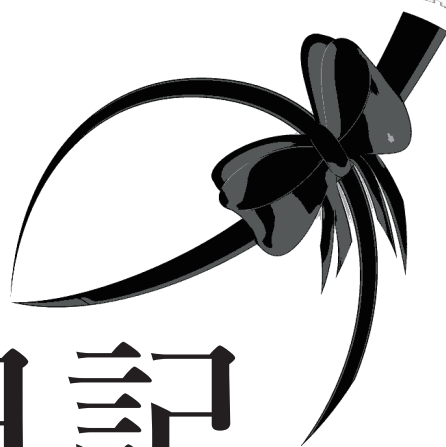
私はにこりと微笑みを返し、左手で彼女の目を隠しました。そして、右手に持ったハサミの先端を彼女の喉元へ突きつけ、返事を続けます。

「祝福などしません。お嬢様のご結婚も、お子様も、この髪も。醜い呪いに従うこの家の全てに。お嬢様、申し訳ありません。もっと早くこうするべきでした」

「……そう」

右腕に力を入れる瞬間、お嬢様の口許が微かな笑みを浮かべました。

天野満



天野日記

○貼り紙

「放置自転車 します」

近所のコンビニの窓にこんな貼り紙がしてあった。

放置自転車をしたらダメじゃないか。一個人ならまだしも、いや、それでもダメなんだけど、ましては一企業が店先に紙を貼り出して宣言するような内容ではない。

俺は考えた。店主の意図を。

これは店主なりの社会に対する *Feedback* なのかもしれぬ。接客業は大変だ。厄介なクレマーが退去して押し寄せたり、フランチャイズ契約をしてる店なら本部からの突き上げが激しく、夜の目も眠れぬ日々を過ごすことになる。

そんな日常に嫌気がさした店主は貼り紙に自らの人生のルサンチマンを託したのでないか。

しかし、放置自転車とは。全身全霊のダークパワーを叩き込んでいるわりには随分と可愛いらしいものだ。

改めて貼り紙をよく見てみると放置自転車、と、します、の間にうつつら赤字で「撤去」と書かれているのである。

赤字の部分が日焼けして、字が薄くなっていたのだ。

全然、伝わってへんやないか。

大量の放置自転車に囲まれながら俺は思った。

そのうち俺の中に怨恨が芽生えて、ジブジブと。

【教訓】

・大切なことを強調しすぎると却って伝わりにくくなる場合がある。

・人生のルサンチマンを託すには、放置自転車は少し頼りない。

・そもそも放置自転車をしてはいけない。(了)

氷川省吾



トウマーン

Vol.1

登場人物

ロシア陸軍 第32独立自動車化狙撃師団

ユーリ・メリニコフ……………上等兵 先任ライフル射手

ジーマ・マカロフ……………ライフル射手

ヴァシリ・ジューコフ……………小隊選抜射手

セルゲイ・モソロフ……………軍曹 分隊指揮官

ディミトリ・クズネツォフ…機関銃手

ヴァディム・グラズノフ……機関銃手補佐

ミハイル・トレチャコフ……対戦車火器運用手

ゲオルギー・セヴィン……………対戦車火器運用補佐

レーニャ・メリニコフ……………少尉 小隊長

レフ・ボロディン……………上等兵 歩兵戦闘車砲手

アントン・コズロフ……………歩兵戦闘車運転手

症例報告

場所

ロシア連邦サハ共和国ポピガイ・アナバル鉱山第8坑道

患者

男性36歳鉱山企業従業員以下患者1

男性29歳以下患者2

男性25歳以下患者3

いずれも特筆するべき基礎疾患はなし

事故発生日時

2028年11月26日午後3時（ヤクーツク標準時）

事故内容

機械的トラブルによって坑道の崩落が発生。患者1、2、3が岩によって負傷。

患者1は重さ約40キロの石が頭部に直撃。岩の一部がヘルメットを突き破り、頭部に重傷を負った。

患者2は重さ約70キロの石に左腕を挟まれた。これによって骨折と裂傷を負った。

患者3は落下して破砕した岩石によって顔面を負傷。

患者はすぐに地上へと引き上げられ、病院へ搬送された。

負傷内容（患者1）

頭頂部から右に5cm程度ずれた位置を中心とする、深刻な頭蓋骨骨折。ヘルメットの破損位置は開放損傷しており、中心部の傷は硬膜にまで達していた。また、傷口への岩の破片・粉塵の混入が見られた。

事故によって患者は意識喪失し、病院への搬送から治療段階まで一貫して昏睡状態にあった。

処置（患者1）

硬膜の損傷による硬膜下出血、頭蓋骨および岩の破片による脳への損傷、開放損傷からの細菌侵入による脳炎の危険があったため、即座に外科手術による傷口の処置が行われた。

患部を切開し、頭蓋骨と岩の破片を除去。脳圧制御のためのドレーンを挿入。患部の滅菌処置が施された。

MRIによる検査では脳の血管の損傷が一部に見られたものの広範なダメージはなく、処置は問題なく完了。岩石粉末の頭蓋骨内側への混入が懸念されたが、混入患者のバイタルは安定しており、経過観察へ移行した。

負傷内容（患者2）

右腕が肘から18cmの位置で挫傷。橈骨と尺骨が骨折。当該位置から手首にかけて、長さ25cmの骨にまで達する裂傷。これにより傷口から骨折部が外部に露出する開放骨折となった。

処置（患者2）

裂傷からの出血、外傷（特に開放骨折箇所）からの細菌感染の危険が高かったため、即座に外科処置が行われた。

挫滅症候群の可能性が懸念されたが、血中カリウムの値が正常であったために問題はなかったと判断された。

負傷個所の滅菌と損傷が重度の組織の切除を行い、骨の損傷部の整復と創外固定によって骨折箇所を修復。抗生剤の投与を行った。左腕以外の負傷はいずれも軽微な擦傷であった。

意識は明瞭であり、バイタルは正常範囲内。感染症の兆候はなし。

負傷内容（患者3）

負傷はごく軽微であったため、ここでは割愛する。

異常内容（時系列）

処置から6時間後。患者1のバイタルに異常が発生。異常な形態の不整脈が見られた（心電図の詳細は添付資料を参考）。救命措置を取ろうとしたが、異常発生から約5分で全身痙攣が発生。痙攣は約6分継続したが、その後すべてのバイタルが停止。瞳孔散大が確認され、死亡が確定した。

検死の結果、患者1の外傷に黒い砂粒状の物質が付着しているのが確認された。処置の際に岩石片や砂塵は完全に取り除いていたため、負傷の際に付着した物とは考え難い。

また、この物質は単に付着しているのではなく、カビの繁殖と同様の形で以て組織と癒着していることが確認できた。確認のために死亡時画像診断の実施を決定。MRIを用いて頭部内部の画

像を撮影した。

画像撮影中、突如として患者1が蘇生。呼吸・心拍・対光反射の停止から1時間が経過していた。

蘇生した患者1は自力で直立したが、こちらの問いかけには無言であり、反応を示さなかった。診察を行ったものの、心拍と呼吸は停止しており、対光反射だけがあった。近くの有無は不明ではあるが、光や音は認識できているようではあった。他者への関心は示さず、代わりに電化製品、コンセントなどへの走性を示す。動きには運動式失調の傾向がみられたが、自力歩行が可能であった。

MRI画像では、負傷部位を中心とした脳の広範囲において影が確認された。特発性基底核石灰化症に類似していたが、臨床医の所見ではカルシウムとは異なる物質の沈着の可能性があり、病態も異なるとされた。

患者1らが搬送された病院ではこれ以上の検査が不可能であり、未知の感染症の可能性を考慮して、患者及び診察・治療に関わった医師、患者1が滞在した場所の隔離が決定された。

同時にしかるべき設備を備えた施設における患者1の全面検査を要請。患者2および患者3には異常が見られなかったものの、同様に隔離の上、移送が行われることとなった。

2200時までに、国家親衛隊により「ベクター2」への移送が開始される。

遭遇

双眼鏡越しに見える世界は白く塗りつぶされていた。下半分を占めるはずの雪に覆われた地面と、その上にある空間、はるか上にある曇り空との境界を認識することはできない。全てが白い。双眼鏡の焦点がどこに合っているのかも分からない。

地面は雪に覆われ、降雪と巻き上げられた積雪が乱舞すれば、光は乱反射して空間の向こうにある物を見えなくする。この世から切り離されて、どこでもない場所に取り残されたような気分させる。

実際、ここは世界の果てだ。12月のシベリア。ノヴォシビルスクから北に約120kmの地点。かつて、神にも政治にも見放された連中が送り込まれた流刑地。

ユーリ・メリニコフ兵長は双眼鏡から目を離した。倍率を8倍にするレンズが無くなっても、見えている世界は変わらなかった。違うのは、前方に敷設されている鉄条網コルチャヤレンダのラインと、ケブラー製のコンテナに雪を固く詰めた防壁が見えるようになった点だけだ。後は白、白、白。くそつたれの白。何もかもが白い。

その環境に紛れ込むため、ユーリ自身も白づくめになっている。8層重ねにしたVKB O冬季用戦闘服の上に、真っ白な6Sh119擬装用スーツを重ね、特大のサラダボウルのような6B47ヘルメットにも白のカバーをかぶせていた。凍傷を避けるために顔は白の目出し帽で覆い、目は防護用のゴーグルで隠している。着膨れした姿と丸い頭は、中途半端に溶けて崩れた雪だるまを連想させる。

白でないのは暗い緑の迷彩模様をした6B45ボディアーマーと、その表面に下地が見えなくなるほど取り付けた各種のポーチの群れだけだ。

ユーリが属するロシア陸軍第32独立自動車化狙撃師団の第1自動車化狙撃大隊は、似たような装備をまとった450人の兵士から成っていた。それに上位の旅団から合流した150名が、各種の車両と空軍の攻撃ヘリと共に派遣されている。彼らが今やっているのは、身動きせずに吹雪の中で尻を凍らせていることだ。

どうしようもない有様だとユーリは思った。それは誰もが思っていた。だが、何をどうすればいいのか誰もわかっていない。行すべきことを見出すための情報が、決定的に不足していた。

ユーリは白い闇の向こうにあるはずの物を思い浮かべた。ここから西に約3km先に、ユーリら気の毒な兵隊連中がマイナス20度の雪の平原に送り込まれる原因になった「施設群」がある。出動前に聞かされた話では、それは感染症関連の研究所らしい。約96時間前に、そこからの連絡が途絶えた。厳密には、何か異常が起こつたと連絡が入った後、報告が無くなったらしい。吹雪のためにヘリが出せず、仕方がなく内務省が指揮する国家親衛隊の特殊部隊——第604特殊作戦センター「ヴィチャージ」の1個小隊が、確認のために出動した。

そして、そいつらからの連絡も途絶えた。その施設があった場所が、何もかも呑み込む胃袋に変じてしまったかのように。

そこで何が起こったか。それはユーリには分からない。小隊長の少尉どころか、大隊長の中佐も、おそらくは参謀本部のお偉方をわかっていないはずだ。

事態がややこしくなったため、指揮権は内務省から国防省へと移された。国防省の判断は、緊急対応部隊を派遣して様子を確認すること。そのためにユーリらが受けた命令は「包圍してネズミ一匹出さないように見張れ」だった。

これから誰かが何かを知って良い具合の判断を下せるようになるまで、それに従い続けるしかない。

展開した部隊は3つのライフル中隊とそれぞれの支援部隊、そして大隊司令部に分かれ、3部隊がそれぞれ施設に通じる道と平地を封鎖した。1か所につき3個歩兵小隊、合計33人と、3台のBMP・3M歩兵戦闘車が配備されている。

封鎖を行う兵士たちは11人ずつBMPに乗って配備地点へと届けられ、今は100mの間隔を空けて鉄条網と防壁、塹壕で囲ったにわか作りの陣地で待機していた。

ユーリの属する第3小隊の第1分隊は、道路の南側にある小隊陣地の中央に陣取っている。

1つの小隊待機地点につきT・90M戦車が一両と迫撃砲分隊も配備されていた。全体を統括する大隊司令部は、前線の連中から連絡があり次第、自分たちが従えている膨大な火力をぶちまけさせるつもりでいる。

その連絡はいつまでたつても来ない。施設どころか小さな町を地面ごと耕して更地に出来る力を持つ集団は、その力を向ける先をいつまでも見いだせないでいる。

戦車砲も機関砲もライフルも、文字通り雁首をそろえて真っ白なスクリーンの方を向いているだけだった。どこからか連絡があればいいが、悪天候によるものか無線の状態まで良くない。目ば

かりでなく耳までふさがれかけている。

今の第1自動車化狙撃大隊は、耳栓に加えて目隠しまでされた、筋骨隆々の大男と言った状態だった。図体がでかいだけのくの坊だ。

「風が止まりましたね」

隣から声が聞こえ、ユーリは物思いから覚めた。横にいるヴァシリ・ジュコフが、防壁の上にライフルを置いて前を眺めている。ユーリと同じ格好をしているために人相と体格の区別はつかないが、手にしているのがAKではなく、上にスコップが付いたSVCh狙撃銃である点で見分けがつく。小隊付き選抜射手の得物だ。

「ちよつと見晴らしが良くなるかもしれませんね。何か来たら撃てますよ」

ヴァシリの声は運動会の前の子供のように弾んでいた。まるでガキだが、実際にまだ18だった。高校を出て入隊し、基礎訓練を終えて配備されてから半年と経っていない。まだ味わったことがない戦闘の――冒険の味に飢えていた。凍り付いた世界の果てに送り込まれたことを楽しめるだけの、情熱という空想の火の熱をまだ抱えている。可能なら何か経験を積んで、自分のキャリアに華を添えたいと考えているのかもしれない。

階級が上がった時に、特殊部隊の選抜に応募するつもりだと言っていた。大抵は途中で実力の不足か、情熱を燃やすだけの燃料の枯渇によって止めてしまうことも多いのだが。ユーリは最初からそう言った類の目標を持ち合わせていなかったために、射撃の腕に関しては抜きんでている新兵がどのようなコースを進むか

は分からなかった。

「何も来そうにないがな」

ユーリは再び前に目をやった。ヴァシリの言葉通り、風が止んでいる。舞い踊っていた雪と氷の微粒子も動きを止めていたが、それらが地上に落ちて視界が晴れるには少し時間がかかるだろう。しかし、晴れたからと言って何かが変わるかどうかわからない。敵は何か、そもそも敵がいるのかいないのか。それすら判明していない。

「後詰めの中が来るまで立ち番かもな」

「偵察の人たちに入れてもらったらよかった」

「帰ってこない奴らの仲間入りをしたかったのは、賢い奴のセリフじゃないな」

偵察に行けば活躍の機会が得られたかもしれないが、派遣された偵察分隊はまだ帰ってこない。銃声は聞こえなかったが、定時連絡がない以上、あまりよろしくない状態に陥っている可能性が高い。

ヴァシリが偵察部隊に加わっていたところで、行方不明者のリストが一行追加されるだけだ。載っている名前を行方不明から他のところに移すために、部隊をさらに派遣する価値を大隊司令部が見出してくれるかは分からない。

「本当なら、今頃は飛行機か衛星で様子が分かっているはずなんだがな……」

ユーリたち気の毒な兵士を送り出すよりもはるか以前に、国防省は付近の偵察衛星を施設の真上へと移動させ、さらにはSu-24MR偵察機を飛ばしていたはずだ。雲をも通過する赤外線カ

メラは吹雪であっても何一つ問題なく地上を映し出せるはずだが、何かを得たという話は聞こえてこない。

あるいは、得ることが出来なかったからこそユーリたちが派遣されたのかもしれない。

不意に遠くから空気を叩く音が耳に届いた。それはすぐに鯉と昆虫を合わせたような特徴を持つ大きなヘリコプターの姿となつて、ユーリたちから南に少し離れた位置を通過していった。そのさらに上に、もう一機が存在を示すローター音が聞こえてくる。空軍がよこした2機のMi-35^ガ攻撃ヘリコプター^リは、白い霧の中へと突き進んでいった。

「ヘリで偵察？ 今更？」

前線に偵察に行けるかもしれないという期待を、あっけなく吹き払ったヘリを見送りながら、ヴァシリが不満そうにつぶやいた。

「風が止んだからな。お前を送るよりはるかにマシだ」

あつという間に姿を消したヘリを見送り、ユーリは擬装服の袖をまくって腕時計を見た。午前11時。見張り番に立ってから2時間経っている。

ユーリは振り返り、少し後ろに停車しているBMPの方へ歩いて行った。ユーリたち機械化狙撃部隊の足であり、支援火器でもある装甲車両。戦車とよく似た外見をしているが、乗員2人以外に、歩兵が9人乗ることが出来る。武器の強力さと装甲の頑丈さでは戦車に及ばないものの、主砲の57mm砲は大抵の装甲車両に風穴を開けるのに十分な威力を持っている。

履帯が付いた特大サイズの資源ゴミ缶のような車体の後ろに回り、後部の中央にある大きなドアを叩いた。中で人が動く気配が

してドアが開き、ヘルメットを被った頭がモグラのように出てきた。マスクとゴーグルをしていなかったたので、機関銃手のデイミトリ・クズネツォフだと分かった。痩せぎすで背が高く、本人の感情に関わらず不機嫌な馬のように見える顔の作りをしている。

「交代だ。風も止んだ」

デイミトリは返事をすることなく中に引っ込んだ。ぼそぼそと話す声がした後、ユーリらの分隊を率いるセルゲイ・モソロフの野太く良く通る声が聞こえてきた。

「ミハイル、ゲオルギー、交代だ。おい、ユーリ。風が止んだんだってな？」

「はい^{ダイ}」

「デイミトリ。ついでに湯を沸かしとけ。茶を入れろ。3人分だ。外ならタバコ吸ってもいいぞ。少尉には見つかるなよ」

不満のこもったうめき声が3人分聞こえた後、ドアを通って対戦車ロケット射手のミハイル・トレチャコフと助手のゲオルギー・セヴィンがノロノロと外に出てくる。最後にケトルとコンロ、氷の入ったバッグを手にしたデイミトリが続いた。

「くそ。外に出たくない」

ぼやきながら金属製の箱のような見た目のコンロを開いて地面に置き、中に固形燃料を入れた。セルゲイと運転手のアントン、砲手のレフを抱えたBMPはドアを閉めてしまっている。

「タバコ吸えるから良いだろ。茶は2人分追加」

はいはいと言いつつ氷の塊をケトルに放り込んで、ライターで固形燃料と煙草に火をつける。ケトルが置かれると、ほどなく氷が溶ける音がし始めた。

「いつまでこうしてなきゃいけないのかな」

デイミトリがウンザリしたように言って、煙を吐き出した。

「状況が変わるまでだろ。どこで何してたって同じだ」

「あんたはそうかもしれないが……。おっと、ジーマが帰ってきた」

デイミトリが目上げた先を見ると、小隊司令部が置かれた擬装ネット付きのテントの方から歩いてくる男の姿が見えた。ユーリたちと同じ白い服だが、フェイスマスクは外している。ジーマ・マカロフはずんぐりした体格に似合った丸っこい顔をしている、髭が濃く、すぐに無精ひげにまみれた面になるので、ソ連時代の集団農場に良そうな顔だと言われる。だが、本人は現代の情報デバイスをこよなく愛して使いこなす都会人だった。

「よう。俺の分あるか？」

ユーリたちの近くを来ると、ジーマはケトルの方を指さした。

「足りないから後で入れてくれ。自分でな」

「そりや残念」

顔を上げずに言うデイミトリに苦笑を返し、ジーマはボーチの一つからタバコを出して、固形燃料の炎で火を点けた。

「少尉の近くだと吸えねえからな」

それを聞いて、ユーリはジーマがやってきた所——擬装ネットでおおわれたテントと塹壕の方を見た。小隊長のレーニャ・ソコロフ少尉が、副隊長の上級軍曹と、通信分隊から派遣されてきた技術兵と共にこもっている。

「通信システムはどうなったんだ？」

「相変わらず良くねえな。変なノイズが入ったり、接続が切れた

り。いろいろやってんだけどさ、さっきもつとひどくなつてよ……。俺じゃ何もできねえから、おん出されちまった」

ジーマはアマチュア無線とネットに一家言持っているが、本人曰く「詳しいが正しい教育は受けていない」。それでも調子が悪くなったスマホやWi・fiを直せるので、通信兵技能資格の勉強中ではあるが、今回のように無線の異常の際に呼び出しを受けることがある。だが、今回は役に立たなかったようだ。

「前線の方の部隊の無線の方がひどいって話だ。つまりは俺らだが。広域帯でかなり強いノイズが飛び交っているみたいだ。無線とかタブレットも調子が良くないな。受信感覚が悪いし、動作不良がある。ソフト自体にはエラーはないんだけど。少なくとも、少尉がエロサイト覗いてウイルスを持ち込んだんじゃないってのは確かだ」

「あの兄さんがそれをやったら傑作だ。雑音……、誰かのジャミングか？」

ユーリは、司令テントで頭を抱えているであろう若い士官のことを考えた。直接話をしたことはほとんどないが、頬骨の高い整った顔立ちをした、いかにも優等生らしい雰囲気のスリムな男だったことが印象に残っている。軍人一家の出で、現場での経験を積んだ後、コネでもっとレベルの高い部署に配属されてコースを歩んでいくことになるという噂だ。本人もそれに応えようと肩肘張っているが、それだけにこの訳の分からない状況はストレスになっているだろう。

「若手の中間管理職つてのは気の毒な役回りだな。ジャミングなら広帯域雑音妨害——使ってる周波数帯全部に強い電波をたれ流

して雑音まみれにするやり方ならあるがなあ。今どきの無線で、そんなやり方でダメにされる奴なんかねえよ。この小さいのだって、スペクトラム拡散通信で周波数ホッピングやってんだ。妨害できんのは、アメリカかどっかの電子戦部隊ぐらいだよ」

そう言ってジーマは自分のベストのわきに付いたポーチに入っているR・168・0・1U無線を指した。携帯電話ほどのサイズで、交信範囲は1kmほど。そこから伸びたコードが胸元に付けた制御スイッチを介して、頭に被ったヘッドセットにつながっている。

分隊指揮官の軍曹や小隊指揮官の少尉が使っている物に比べると小さく交信距離も限定的だが、チームで連絡を取り合うには十分な出力がある。ジーマの話ではこのちっぽけな無線でも、複雑な妨害対策と暗号化技術が備えられているらしい。

「理屈はよくわからんが、デジタル万歳。それで、なんでその大層な俺たちの戦術ネットワーク様を通じないんだ？」

「それが分かる人間だったら、こんなところで兵隊やってねえよ」太陽フレアの話とかは聞いてないんだがな。ジーマはそう言って分厚い雲に覆い隠された太陽の方角を見上げた。上には太陽以外に、ロシアが打ち上げた衛星があるはずだった。

ユーリは自分が持っているもう一つの通信装置——NPI・2端末を出して画面に目をやった。GLONASS衛星測位システム——アメリカのGPSと同じ物——がもたらす位置情報が表示されるはずだが、接続無しの字だけしか出てこない。ジーマの言葉通り、前線の小型の通信デバイスに影響が出ているらしい。

「研究施設 ってなあ……。どう考えても真つ当なものじゃな

いのは分かるけど。チェルノブイリみたいなことになっているんとか嫌なんだけどな」

注ぎ口から湯気を出し始めているケトルを見ながら、デイミトリがつぶやいた。

「国家親衛隊の……、何だったかな。NBC偵察車とかが来てるって言ってますでしたっけ？ 兵長？」

デイミトリとジーマのタバコの煙が当たらない風上へと移動していたヴァシリが言った。タバコを吸うと肺活量と体力が落ちるとして、一切吸わないようにしている。アメリカ海兵隊の前哨狙撃兵がそうしていると聞いて、自分も実践しているらしい。

「RKhM・8か。そいつを使う連中も来てるはずだ」

ユーリはここに来るまでに、車列の中に放射線や化学兵器を検査する車両が紛れているのを見ていた。当然、それを運用する技能と知識を持った人間も来ているということになる。

自分たちが包囲している「研究施設」とやらが生物兵器か何かに関わるところだろうということは、ユーリたちにも察しがついていた。ソ連時代には生物兵器の研究開発と製造をしていた民間の拠点、通称バイオプレプラトはいくつもあった。表向きは免疫学や精密機械組み立て工場施設、設計局であるはずの場所が、中身は天然痘やエボラを抱えて研究していた。そんな場所がモスクワやサンクトペテルブルク——当時はレニングラードだったが——のような都市にいくつも置かれていた。

ユーリの生まれた街のノヴォシビルスクの郊外にある国立ウイルス学・生物工学研究センターもその一つだ。最高クラスの設定を持ち、現代でも天然痘のウイルスのサンプルを保管し

ている世界でもごくまれな施として知られている。

最近になって機能の一部をどこかに移したとかいう話を聞いたこともある。連絡が取れなくなったときに、警察の代わりに国家親衛隊の特殊部隊が装甲車に乗ってお出かけするとなれば、「研究施設」がそれに値する場所であることは誰にでも察しが付く。

ユーリたちを雪だるまにする決定をしたお偉方は、雪だるま連中が炭疽菌や天然痘といった危険な代物の苗床になる可能性があるのと知っている。それ故に数も多くないNBC偵察車をわざわざ派遣した。

「そういうやばいバイ菌の専門家が来ても何も言ってこないってことは、今のところ心配することもないんじゃないのか？」

ジーマがタバコを吸い終え、雪に押し付けて火を消した。

確かに危ない病気であっても、近くまで運んでくる物がなければ感染しようがない。

こちらに来るとしても、ガスマスクと防具スーツを着用する余裕は十分にある。さらに、BMPは汚染された環境でも兵士を守れるように、危険な物質が中に入り込まないようにになっている。移動式の機関砲付きシェルターだ。

問題は生物兵器による攻撃があるかもしれないということではない。誰が危ないバイ菌の金庫を荒らしに来たのかということだ。結局、疑問はそこに回帰する。敵は誰か？

テロリスト？ どこかの国の特殊部隊？ アメリカか、イギリスか、中国か。

敵国の特殊部隊やテロリストが危険な細菌を保管する施設を襲撃？ それでヒーローが単身で敵を相手に大暴れ。ふた昔前のハ

リウッド映画ならありがちな設定だが、現実には陳腐すぎる。

ちゃんとした研究施設なら、研究者も従業員も、おそらくは警備を担当する部隊もいる。それを丸ごと黙らせられるほどの数と装備をそろえた連中が、ロシアのど真ん中に到達するまでに誰も気が付かないというのはあり得ない。それにもしも何かの目的があるならば、施設を占拠した後には仰々しい内容の連絡をクレムリンに送るか、ユーリたちがあたりを取り囲むまでに逃げ出すかのどちらかだろう。

吹雪のせいで逃げ損ね、その間に600人以上の兵隊と戦車部隊に囲まれて逃げられなくなったとなれば素晴らしい冗談になる。それが本当なら、ユーリたちは危ない細菌やらウイルスやらを保管している施設に立てこもった連中を掃除する仕事が課せられることになるので、笑い話にはできないが。

誰かがいても、2 km以内に近づけば出てこれば機関砲と戦車砲で切り刻んでやれる。病原体を抱えていても、こちらの体内に引っ越しされる前に氷点下の環境に再びぶち込んで終わりだ。冷凍庫の中か野外かの違いだけだ。

そうなれば話は簡単だが、それほど単純ではないことはユーリにも分かる。何か良くないことが起こっている。それが何か知らないだけ、あるいは理解できないだけで。

「さつさと帰りたいな」

「俺もそう思うわ」

ぼやくのが止まらないデイミトリに、ジーマが同意する。ユーリも同じ気分だった。ただし、寒いのが辛いという意味ではなく、なんとも言えない嫌な気配を感じているせいだった。

「あれ？」

ふと、ヴァシリが声を上げた。

「風、止んでますよね。ちょっと前から」

それがなんだよ、とジーマが言うが、ヴァシリは上を向いて辺りを見回した。

「全然見通しが良くならないんですね。吹雪いてないのに」

そう言われて、ユーリも気が付いた。先ほどまで自分たちがいた位置の向こうにある有刺鉄線の方を見るが、そこから先は相変わらず白一色で占められている。風がないにもかかわらず、空間が白い粒子で閉ざされていた。まるで濃霧の中にいるように。

この近くに川や湖はない。あっても凍り付いている。気温が氷点下なので、霧を生み出すための大気中の水分はほとんどない。そのはずだが、辺りは相変わらず白く閉ざされている。

ユーリの中に漫然と巣くっていた「嫌な予感」が凝固して形をとり、不快感に似た物へと変じていくのが自覚できた。それが伝わったのか、ジーマとデイミトリも不安げな表情を浮かべて辺りを見回した。

セルゲイか、少尉のレーニャに言うべきか。それとももう少し様子を見るべきか。逡巡していると、空気を叩く音が遠くから聞こえてきた。1機だけで、かなりの速度を出しているようだった。

「ヘリが戻ってきた……」

やっぱり役に立たなかった。ヴァシリがそういった時、ローターが空気を叩く音に被さって、布を引き裂くような、あるいは携帯の振動のような音が響いた。ユーリにはそれが何かわかった。Mi-35の機首下に搭載されている23 mm機関砲の射撃音だった。

た。1秒間続いて、さらにもう1秒間連射する。それが繰り返される。

ヘリが何かを撃っている。敵が来ている。そう思った時、ユーリたちの耳に、無線を通じてレーニャの声が届いた。

『青0・1から全分隊へ。総員戦闘配置！ 繰り返す、総員戦闘配置！ 西から正体不明勢力が多数接近。ヘリ部隊が交戦中！ 戦闘配置だ！』

司令テントの方を見ると、2人の兵士が出てくるのが見えた。片方は副隊長で、北側の第2分隊に合流するために走っていた。少尉のレーニャはユーリたち第1分隊の方に真っすぐ向かってくる。

全員のスイッチが入った。デイミトリがケトルをコンロの上から退けて中身を捨てた。ユーリもコンロの固形燃料を雪の上に放り出し、踏みつけて火を消した。雪に突っ込んで一気に冷まし、BMPのランブドアを開いて座席の下に放り込む。中に残っていた機関銃手補佐のヴァディム・グラズノフが、PKP汎用機関銃とRPG・7V2ロケット弾発射機の発射筒を手にして飛び出してくる。

「機動チーム、右の火点に行け！ 支援チームは軍曹と共に左で待機。ヴァシリは私と共に監視だ。行け、行け！」

レーニャが大声で指示を飛ばした。教本通りの戦闘配置だ。少なくとも間違った指示は飛ばしていないはずだが、レーニャの声が緊張でわずかに上ずっているのがユーリには分かった。

ゲオルギーと共に見張りから戻ってきたミハイルにRPGを、デイミトリにPKPを渡して、ヴァディムは歩兵戦闘車の左側に

回り込んだ。機動チーム——ユーリとジーマのコンビは防壁に沿って右手に移動し、工兵がショベルカーで掘った浅い塹壕に陣取った。

塹壕の中でユーリはこの日初めてライフルを肩から降ろした。鋼鉄とプラスチックで作られた黒色のAK・12突撃銃には、迷彩の代わりに白のテープが巻き付けられている。銃身下にGP・34グレネードランチャー、上にシャヒン赤外線照準器を装着した姿は、お世辞にも美しいとはいえない。ただし、頑丈だという点においては世界トップクラスだ。金属が凍り付くような温度でも、雪が中に入り込んで水びだしになっても問題ない。

ユーリは銃の下から突き出している弾倉を外した。中に真鍮と銅の輝きを持つ5.45×39mm弾が詰まっているのを確認し、元通り装着する。AKの右側面にある安全レバーを下に動かし、装填レバーを軽く引く。薬室に弾薬が装填されていることも確認すると、レバーを放して元通りにした。後は引き金を引けば弾が出る。

ユーリは防壁の上にライフルを出し、照準器を覗き込んでスイッチを入れた。10秒程度で自動調整が完了し、今まで真っ白であった視界は、照準器を通すと明るい灰色の濃淡で表現された3.6倍に拡大された光景になった。人間が見る可視光ではなく、機械が捉えた遠赤外線領域の世界だ。

全ての物体は絶対零度でない限り、必ず赤外線を放っている。温度が違えば放つ強さも異なる。人間、樹木、車両、土、雪。赤外線は波長が長いので、ある程度なら霧や煙も通過する。捉えることが出来れば、たとえ霧の深い闇夜に草の間に隠れたとしても、

周囲の気温と無関係に体温を保つ熱を放つ人間の姿は、尻を丸出しにして光っている蛍のように容易く見つけ出せる。

ユーリはAKを構えて、前方をゆっくりと走査した。双眼鏡で見た時には見えなかった物が目に入ってくる。まばらに生えた樹木、雪に半ば埋もれた灌木、小さな土手、人が隠れるには小さすぎる岩。射撃計画を立てる際に、どこか距離に何かがあるかはおよそ把握している。

ヘリが放つロケットの着弾音はまだ遠い。シャヒンで人間の形が見分けられる距離は400m程度なので、まだ見えないはずだ。相手が本当に人間ならば、だが。

戦闘音がする方へと照準器を向けた。何か違和感があった。まだ見えるはずの範囲に遭った木や岩が見えない。150m程度までなら見えるが、それ以上先は肉眼で見た時と同じような具合になっている。

「おい、なんか遠くが見えねえんだが……」

同じように赤外線画像を見ているジーマが不安そうに言った。ユーリは無線に接続している胸元のスイッチを操作して、BMPに乗っているセルゲイを呼び出した。

「青^{シレイ}、1・1。こちら青^{シレイ}、1・2。赤外線装置の調子が悪い。視認できる距離が短い。150m未満。1・3も同様。そちらはどうだ？ どうぞ^{ブリオン}」

「1・1。こちらの画像も不明瞭だ。こちらは1km以下まで落ちている。遮蔽する煙が出ている様子はない。大気自体が赤外線を通してにくくなっているように思える」

BMPの暗視装置はちっぽけなライフル用照準装置よりもはる

かに遠くまで見えるが、そちらも性能が落ちている。大気そのものが赤外線を見えにくくしている。やはり周囲を閉ざしている物がただの霧や氷の微粒子ではないのだとユーリは確信した。こいつは何かが違う。

有毒な物ではないかという懸念が浮かんだが、その手の兵器の専門家は何も言っていない。いずれにしても、今からガスマスクをかぶるには遅すぎる。

「青^{シレイ}、1・2から1・1。敵との具体的距離が知りたい」

『了解、1・2。戦術ネットワークにアクセスする。少し時間が……』

そこまで捉えたユーリの耳に、強烈な痛みとぶん殴られたような衝撃が走った。最初はそれが何か理解できなかったが、ヘッドセットから大音量のノイズが発生しているのだと気が付いた。

耳からアイスピックをねじ込まれて、蝸牛と脳をかきまわされるかのごとき痛みと不快感が、頭蓋の中で跳ねまわった。ヘッドセットをはぎ取ろうとしたが、ヘルメットを上からかぶっていたせいでうまくいかなかった。ようやく無線のスイッチを切るという発想に至り、脳が鼻から流れ出る前に音を止めることが出来た。

破壊的な音は、人工的に音を出すための機材のすべてからあふれ出していた。この世の電子機器のすべてが一斉に発狂し、スピーカーやヘッドセットを通して狂気をぶちまけているかのような有様だった。恐ろしいことに、離れた隣の方隊の方からも聞こえてくる。

脳の髄液に波が立っているかのような感じがするが、少なくとも会話はできるようになっていた。まだ絶叫している無線やス

ピーカーはあるが、数が少なくなりつつある。残っているのは、何とかしようと試みている連中の分だろう。

「何なんだ！」

「知るか！ とりあえず誰かが仕掛けてきてるんだろ！」

ユーリが怒鳴ると、同じぐらいの大声でジーマが怒鳴り返した。声が大きいののは、まだ耳がしびれているためだけでなく、唐突な「攻撃」に神経が興奮し始めているせいだと理解していた。

状況は混沌としていた。敵の規模・正体は不明。だが、2機の攻撃ヘリに機関砲とロケットの洗礼を浴びせられているにもかかわらず、動きを止めずにこちらに向かっていているらしい。そんなことが出来るのは、映画に出てくるゾンビの大群ぐらいだ。だが、ゾンビは無線を絶叫させることはできない。

ここまで来れば全員が確信していた。これから来る「敵」は普通ではない。

あらゆる戦いと同じように、始まりは唐突だった。北側——第2小隊——から戦車砲の砲撃の音が響いてきた。それに誘発されたかのように、3つのBMPの音が続く。125mmが1つと57mmが3つ。奇妙なリズムを持った重低音のセクションが響く。白い闇を通して、砲口から吐き出された火花が火花のように瞬くのが見えた。

「あいつら何を撃ってるんだ……」

ジーマが先ほどよりもさらに不安を募らせた声でつぶやく。ユーリもそれを聞きたかったが、無線のスイッチを入れると、今度は耳が脳が答えを受け入れる能力を失いそうだった。

さらに北にいる第1小隊も砲撃のパーカーションを始めた。す

ぐに第3小隊もそれに続き、ユーリの斜め後ろにいるBMPも砲弾を次々と吐き出し始めた。撃ち出された砲弾は、空気を切り裂いて白いスクリーンの彼方に消えていく。BMPの砲撃の合間を縫うように、125mm戦車砲が砲弾を放つ。それらは西側——例の「研究施設」がある側へと撃ち込まれていた。

ユーリは銃をそちらに向け、照準器越しに注視した。赤外線で見えた視界の中で、高熱を持った砲弾が飛んでいく様子が白い光の筋になって見えた。砲弾が照準器でも見えない距離に達した後、炸裂する音が遅れて届いてくる。その音が徐々に近づいてくることに気づき、ユーリは緊張と恐怖の混合物が腹にたまってくるのを感じていた。

炸薬を目いっぱい詰め込んだ鋼鉄の塊が、豪雨のごとく飛んでくる中、「そいつ」あるいは「そいつら」は前進してくる。ソ連時代の機甲師団さえ食い止めて、叩き潰せるだけの火力。それをものともしない存在が、こちらに向かってきている。

ほどなく、砲弾の爆発が生み出す光が、霧を通して見えるようになった。千度以上の火花と炎が生み出す熱が、一瞬しか咲かない花となって遠く離れた場所を照らす。地面から10mの高さで。

砲弾を直撃させるのではなく、任意の位置で空中炸裂させ、敵に破片を浴びせかけているのだと思ったが、すぐに違うのだと気が付いた。爆発した火花が、高さ10mの位置で、何かの表面に当たって弾けている。

さらに数発の57mm弾が同じ位置に吸い込まれ、同じように爆発した。倒したのかどうなのかはわからないが、違う方向へと撃ち込まれ始める。戦車の125mm砲がそれよりも50mほど

離れた場所に撃ち込まれた。人間や戦車を的にした時よりも明らかに高い場所で砲弾が爆発する。次は10mほども高くなかったが、上に何か長い――クレーンか特大のアンテナのような物の影が見えた気がした。

上空にいるMi-35の音がこちらに近づいてきていた。上空から放たれる23mm砲弾が、一筋の線となって地上へと突き刺さる。けたたましい音と共に飛んできたS-8ロケット弾は、上空で炸裂して無数の破片を降り注がせた。

「何か来てるぞ！ 速い、速い！ 動物か？」

ジーマの声で、ユーリは慌てて視線を移動させた。その言葉通り、砲撃を食らっているものより小さい何かが走ってくる。小さいので遠い距離から見えにくく、砲撃が大きい奴に集中しているせいで逃れたらしい。

ユーリはそいつらに照準線を合わせた。見える限りでは数は7〜8体。だが、次々と近づいてくる。大きさはまちまちだ。牛ぐらいの奴もいれば、大型犬ぐらいの奴もいるように見える。四本足で走っている奴、トカゲが這うような動きをしている奴、二本足で歩いてそうな――人間を連想させる――奴、ダチョウのような見た目の奴もいる。照準器の中で表示される色は暗く、向かってくるそれらが人間や犬のような恒温動物ではないことを示していた。まるで金属か石のようだ。

「近づけるな！ 撃て！^{アゴイ} 総員、射撃開始！ 射撃開始だ！」

砲声の中でレーニャが声を張り上げた。真っ先にデイミトリが反応し、PKP機関銃の連射が始まった。短く区切って連射される弾丸が光のリボンになって、走ってくる影の一つを捉えた。1

発でも人間を即死させる7.62mm弾をともに食らったそのつは無様に転倒したものの、すぐに起き上がった。動きがおかしくなっているように見えたが、まだ生きているのは確かだった。

次の連射がそいつを切り刻んだ時、横を通り抜けた奴を別の一発が捉えた。ヴァシリのSVCh狙撃銃は、頭と思われる部位を正確に撃ち抜いたようにみえた。そいつは少し転んだだけで、元通りに走り始めた。

次の瞬間に地雷のワイヤーに引っかかった。雪の中に立てて隠されていたMON-100指向性地雷は、爆発と共に大量の鉄球を前方へ扇形にばらまき、近づいてきた奴らを何匹かまとめて細切れにした。

感動に値する威力だったが、砲撃を潜り抜けてくる生き物の数は一向に減らない。その一方で、ユーリたちが設置した地雷の数は有限だ。

ユーリはライフルの照準を、迫ってくる奴の一体に向けた。イノシシほどの大きさだが、犬にも似ている。だが、手足が異常に細く、上半身が上に大きく盛り上がっていた。どんな動物かは見当もつかない。

ユーリは距離を推測して引き金を引いた。鋭く乾いた銃声が生じ、反動で照準が動いてぼやけたが、手前に着弾したことが分かった。その分を修正し、次からは5回続けざまに弾丸を送り込んだ。1発で相手が倒れないことは知っていた。動けなくなるまでぶち込んで黙らせるしかなかった。

続けざまに撃ちまくり、弾倉の中身の半分を消費したところで、照準の中の相手が倒れた。足か何かが吹っ飛んでいる。まだ動い

ているようだが、少なくとも走っては来れない。

ユーリは標的を、もっと手前に来た相手へと変更した。距離が近くなった分だけ、相手の姿形が見えるようになっていた。

そいつに照準線を合わせたユーリは、怖気が背骨の中を走るのを感じた。それは子牛ほどのサイズがあった。足らしきものが何本も体側から斜め上に向けて突き出し、地面を掻いて前進している。頭のあたりから、大きな球体が長い首を介して垂れ下がっていた。

そいつのすぐ後ろにいる奴は細身で、足は真下に向けて伸びている。だが、体中から角のような細い物が突き出していた。体の下には細い物が垂れ下がっている。あたかも裂けた腹からこぼれだした腸のように。

ユーリは撃った。もはや本能的な行動だった。こいつはあつてはいけないモノだと分かったからだ。殺す――正確に言えば消すべき相手だ。宗教や個人の嫌悪を超えて、人類が排除するべき存在だと感じていた。

発作にも似た感情を吐き出すかのように弾丸をぶちまけた。瞬間に弾倉が空になった。

「ジーマー！ 撃ち続けろ！ とにかく撃て！ 全部ぶち殺せ！」
空になった弾倉を取り外し、新しい物をポーチから取り出しながらユーリは怒鳴った。

「やってるよ！ くそバケモンが！」

その言葉から、ジーマも自分と同じ物を感じたのだと、ユーリは分かった。殺すべきものが近づいてくる。

新しい弾倉を銃に装着し、装填レバーを引いて弾薬を薬室に送

り込む。腰回りに付けた小さなポーチの一つから、30mm榴弾を引き出した。AKの銃身下に装着しているGP-34グレネードランチャーの銃口に小さな爆発物を装填すると共に、ランチャー用の照準器を引き起こす。

ユーリは「あいつら」が押し寄せる方角に銃を向けた。肉眼では連中の姿はまだ霧の向こうだったが、ランチャー用の照準がおおよその距離を示す角度に銃を傾けて、榴弾を発射した。

放物線を描いて飛び出した榴弾が白い闇の向こうに消え、小さな爆発音を届けてきた。

ユーリはAKの射撃切り替えレバーをフルオートへと切り替え、照準器越しに見えるものすべてに弾を撃ち込んでいった。すぐに撃ち尽くさないように、連射を短く区切って発砲したが、一気に撃ちまくって弾幕を張りたいという思いを抑えなくてはいけなかった。近づくべきではない存在を遠ざける腕が必要だった。

瞬く間に2つ目、3つ目の弾倉が空になった。薬莢が足元の雪の中に積もり、ユーリが銃の向きを変えて体を動かすたびに擦れ合うのが分かった。

やがて4つ目が空になった。奴らはかなり近づいてきている。分隊全体で20匹は殺した――少なくとも向かつては来れなくしたが、1匹殺すために人間ならミンチになるほどの弾丸を撃ち込む必要がある状態では、相手の物量に押されるのは分かり切っている。

砲撃の着弾音も最初よりも明らかに近くなっている。戦車とBMPが撃っている相手の姿は、ユーリたちの照準器でも見える範囲に到達している。姿がそれなりに分かった奴の一体は、象ほど

の大きさをしていた。極端に長い前脚でゴリラのように歩いている。頭があるはずの部分には、なぜか舌のように長い物が付いていた。

戦車砲弾がともに統一の横腹に直撃し、胴体が真っ二つになったが、そいつは片方の前脚だけで前進し続けた。2発目が直撃して残った部分を複数のパーツへと解体するまで、そいつは止まらなかった。

A Kに5つ目の弾倉を装着した時、霧の中から黒い影が飛び出してくのが見えた。運よく地雷原を突破してきたらしいそいつは、まったく速度を落とさないうまま突進してきた。ユーリたちの前方に設置された鉄条網が、何とかそいつを食い止める。高張力鋼で作られたカミソリワイヤーに絡め取られながらもがくそいつの姿を見てしまったことを、ユーリは後悔した。

そいつは鹿ほどの大きさだった。だが、鹿ではないことぐらいは誰にでもわかった。

そいつには毛皮はなかった。皮が剥がれた生き物に似ていたが、色は灰色だった。頭というべきかどうかは分からない。頭があるべき場所は首の真ん中あたりから縦に裂け、斜め左上までバツクリと開いていた。頭全体が逆三角形の、灰色の肉でできた花弁のように広がり、牙とも角ともつかない物が縁と内側にいくつも生えている。

ワイヤーを体中に巻き付けたそいつは、「口」を激しく開閉して、蹄の代わりにトゲだらけの棍棒のようになっていて足先で宙を掻きむしった。それだけ激しく暴れているにもかかわらず、声を一切出さないのが、形態以上にその存在の異常さを醸し出していた。

「ぶち殺せ！」

吐き気にも匹敵する嫌悪感に襲われ、ユーリは叫んだ。フルオートで、そいつの頭目掛けで弾丸をばらまく。ジーマもそれに倣った。奇怪な頭部が粉々にされても動きは止まらず、胴体にも十数発が撃ち込まれ、足の一つが弾け飛んだところで、それはようやく動きを止めてワイヤーにぶら下がった。

その間に、地雷が新たに爆発した。何匹か消し飛んだようだが、これで止まるはずがない。

もはや肉眼でも影が見える位置まで近づいてきた、体長が十数mもあるデカブツの1体が、第2分隊のいる方向へと突進していくのが見えた。鯨のような流線型の体だが、獣のそれに似た両手足が四本以上生えている。第2分隊のBMPがそいつに砲弾を5発撃ち込んで頭の上半分を吹き飛ばした。それでもスピードを緩めようとしないうそいつへと更なる砲弾が撃ち込まれるはずだったが、なぜか続く弾は放たれなかった。

真正面で地雷が爆発しても止まらず、鉄条網を質量と速度で押しつぶし、化物は防御線を突破して第2分隊のエリア内へと踏み込んだ。

57mm砲と地雷、鉄条網の防御ラインが失われた隙をつき、異形の存在がそちらへと殺到して行く。

ユーリは第2分隊へと向かう小さい奴らへと銃弾を浴びせたが、すぐに狙いを自分に向かってくる奴らへと戻さざるを得なかった。ミハイルの放ったロケット弾が代わりを務めたが、一度傾いた流れは変わらない。

突然、ホイッスルが2回吹き鳴らされ、もう一度2回鳴らされ

た。

「第2分隊を援護！ 合流して全集防御へ移行！」

レーニャが叫んで、銃声と砲声を通して小隊全員に聞こえるように、もう一度同じ形でホイッスルを吹いた。100年以上前から戦場で使われている号令の手段は現代でもその有効性を示し、右手の第3小隊のBMPが砲撃を続けながら移動し始めるのが見えた。レフたちが乗る第1分隊のBMPと戦車も、砲塔の向きは変えずに車体を旋回させ、移動準備を開始する。

「ジーマ！ 手榴弾、手榴弾！」

ユーリは怒鳴り、右腰後ろのポーチからRGD-5手榴弾を取り出して、左手で安全ピンを引き抜いた。ジーマも同じように手榴弾を取り出し、同時に防壁の向こうへ放り投げる。身を隠した直後、爆音とともに黒煙が激しく噴き上がった。

「先に行って、少尉と合流しろ。援護する。合流したら俺も行くから援護してくれ」

そう言いながら、ユーリは赤外線照準器をスコープマウントごと銃から取り外した。視野が狭い望遠照準器は、敵が突っ込んでくる状況では役に立ちそうにない。

「行け！ 行け！ 行け！」

牛をけしかける時のように怒鳴って、ユーリは身を乗り出して射撃を始めた。霧のスクリーンの向こうに少しでも影が見えれば、そちらに向けて弾丸をばらまく。撃ちながら、ユーリは自分がここで死ぬ可能性が高いと理解していた。予感というよりも、それは単純な必然だった。

死ぬこと自体には特に思うことはなかった。それほど大した人

生を送っているわけではないし、成し遂げなくてはいけなさと感じるようなことは、今のところなかった。撃つのはそれが「役割」であるからに過ぎない。そして、目の前の害獣どもは殺すべき存在だとささやく本能のためだった。

5本目、6本目の弾倉が空になった。7本目を取り出して装着する。身に着けている弾倉の残りは3本になった。

「ユーリ、来い！」

ジーマの声が聞こえた。弾薬を薬室に送り込み、ユーリは塹壕から飛び出した。雪に足を取られながら、移動するBMPの方へと走る。雪は深く、酷く走りづらい。ジーマとヴァシリが、ユーリの後ろめがけて撃ちまくっている。

背後に一気に迫ってくる足跡を耳が捉えた。思わず振り向いたユーリの目に、自分めがけて飛び掛かって来ようとする奴の姿が写った。そいつの顔は猫に似ていた。可愛いと言ってもいいぐらいの顔立ちだった。ふさふさとした毛が生えているようにも見えた。

だが、大きさは一抱えもありそうなほど大きかった。体には四本足の代わりに、人間のそれに似た長い二本足が備わっている。そいつが口を開けた。本来の口ではなく、下顎のあたりがバックリと開いて、驚くほど人間のそれに似た口が生じた。

マズい。ユーリの脳は冷静だった。やはりここで死ぬか。

そいつの顎が大きく開き、ユーリの頭に噛みつくべく足を縮めた。直後に猫の左目が破裂し、首が横にへし折れた。

足を止めずに前に目を戻すと、ヴァシリのSVChがこちらを向いていた。文句なしの射撃だった。

ユーリが合流し、分隊はBMPを盾にして、第2分隊の方へと移動した。防御線を突破された分隊は、隊員の数が減っていた。ユーリが見ている目の前で、化け物がライフルを持つている隊員を捕らえた。4tトラックほどもありそんなダンゴのような体に、カエルに似た細長い手足をしている。胴体の前側は大きくえぐり取られ、牙とも肋骨ともつかない物が湾曲しながら飛び出していた。右前脚が兵士をわしづかみにして持ち上げ、鋭く長い牙に囲まれた口へ放り込む。

その手前に、カタツムリの殻のような胴体を、何本もの細長い足で2階の高さに持ちあげた奴がやってきた。長く引き伸ばされたカメラリの前脚に似た脚を振るって、眼窩の兵士の一人を串刺しにする。

BMPの上にはバスほどもあるモグラのような奴がのしかかって、湾曲した前脚で砲塔をひっかいていた。そいつの頭の先端部は、なぜか蜘蛛の胴体の腹側を前に向けて取り付けたかのごとく、節のある足のような物が何本もうごめいていた。

ミハイルのRPGがカタツムリの胴体を直撃して破裂させた。長い足がバラバラになって、串刺しになっていた兵士が取り落とされる。遠いのと皆同じ装備をしているせいで、それが親しい誰なのか、ユーリには見分けがつかなかった。死ぬときは誰だっそうだ。目の前にいる親しい人間以外にとって、あまりに頻繁に生じる物事の一つにしか過ぎない。

続けざまに57mm砲弾が撃ち込まれ、第2分隊のBMPにのしかかっていたモグラの頭が弾け飛んだ。それでも動き続ける胴体に向けて2発撃ち込まれ、上半身がずだ袋のようになると、よ

うやく車体からずり落ちた。

頑丈な装甲に守られた車体は無事だったが、砲塔からは照準装置が失われ、砲身も折れ曲がっていた。強力な火力が失われたところへ、大小さまざまな化け物が群がっている。

第3分隊の方はまだ持ちこたえていた。こちらと同じように、BMPを盾にしながら合流するべく近づいてきている。その頭上に影が差した。弾帯を交換しようとしていた機関銃手が上を向いた瞬間、直上から降ってきた物が彼を押しつぶした。象並みの巨体を持つ羽毛の無いヒヨコ——ただし、頭は二つあり、へびに似た首の先端に、猛禽類のくちばしその物の形をした頭が付いている。尾は異常に細長く、のたうっていた。

そいつが頭を一振りすると、近くに立っていた機関銃手補佐の上半身が消え去った。くちばしの間から大量の血液が吹きこぼれた。

そいつを撃とうとBMPが砲塔を回したが、別の——バス並みにデカイイモムシのように見えた——が突っ込んできた。20t近くある鉄の塊が傾き、かろうじて戻ってバウンドする。イモムシは——歩脚はそれぞれ蹄のついた足になっていた——BMPの車体へのしかかり、砲塔を腹の下に押しつぶしている。その間に、双頭のヒヨコは頭を振って別の兵士の体を真つ二つにしている。

もうすぐ自分たちの分隊も同じ有様になる。ユーリはそれを理解していた。だが重要なことも見て取れた。それなりにサイズがある奴でも、装甲車そのものを破壊する力はない。中に閉じこもれば生存できる。

ユーリは自分たちのBMPの後部に駆け寄ってドアを開いた。

幸いなことに、車内からロックされていなかった。兵員室には左右に3つずつの席が向かい合わせに設置されている。砲塔の基部の向こうに、車長、運転手、砲手の席が横に3つ並んでいた。

「軍曹、退避します」

うずくまったクマを思わせるセルゲイの後ろ姿に呼び掛けた。振り向いたセルゲイは、すぐに意図を理解して頷いた。ユーリは外に顔を出して全力で叫んだ。

「退避だ！ 車内に退避！ デイミトリ、制圧射撃しろ。ミハイル、ゲオルギー、先に行け！ ヴァシリ、少尉と一緒に次だ！」

ユーリはドアに背を向け、ライフルを構えた。その途端、誰かが片を掴んで乱暴にゆすぶった。レーニャだった。

「兵長！ 勝手な真似をするな！」

マスク越しでは表情が分からなかったが、ゴーグル越しに見える目が大きく見開かれている。映っているのは怒りではなく、恐怖と動揺だった。自分の能力をはるかに超える事態に見舞われたために、処理が追い付いていない。間違った方向にあふれさせられている。

それどころじゃありません。そう言おうとしたとき、少尉の斜め後ろから、何かがまっすぐ突っ込んでくるのが目に入った。

ユーリが警告を発する間もなく、そいつはレーニャの背中につかつた。二人がまとめて雪の上に弾き飛ばされる。バイクにはねられたのかと思うほどの衝撃だったが、雪のおかげで倒れた時のショックは小さかった。すぐに身を起こし、転がっていたライフルを見つけて引き寄せる。

誰かが何かを叫んでいる。そちらに目をやると、倒れたレーニャ

の上に何かがのしかかっていた。小さなクマほどもある、毛のないネズミに似ていた。目があるはずの部分からは、カニのハサミの形をした何かが生えている。下あごが左右に分かれており、顔をかばったレーニャの左腕を挟み込んで、ノコギリ並みにびっしりと生えた牙を食い込ませていた。頭を振りたくって引く張るたびにレーニャが叫び声をあげている。

ヴァシリが駆け付け、そいつの頭にライフルを釘打ち機のように押し当てて弾丸を撃ち込んだ。目のあたりを粉砕されて飛びのいたそいつに、追加で弾丸を浴びせかけて撃ち倒す。

レーニャの左腕は肘から先が赤黒く染まっていた。ヴァシリが引き起こすと、少なからぬ量の血が雪の上にこぼれ落ちた。背後からは別の化物が何体か走り寄ってきていた。

ユーリが銃を向けると同時に、戦車が横手から姿を現して、近づいてきた奴らをまとめて轢き潰した。向こうからは、第3分隊とBMPが弾幕を張りながら近づいてきているのが見えた。

不意にユーリは足元に振動を感じた。砲撃や砲弾の爆発による鋭さを伴った振動ではない。もっと重たく、鈍く、そして規則的だった。

地響きだと気づいた時、走り寄ってきた戦車が発砲した。砲身は最大まで仰角を取っている。非常に遠くを狙う時か、非常に高い場所を撃つ時のように。

ユーリは砲口が向く先を見た。霧の向こうに建物があった。あ

るはずのなかった建物だった。高さは50mほどもありそうだ。

戦車砲が再び吠え、炎と砲弾を吐き出す。57mmとはけた違いの衝撃と轟音に顔をしかめたユーリの視線の先で、建物の中腹

で爆発が生じた。

建物はゆっくりと——その実かなりの速度で近づいてきた。

バカでかい奴だった。それ以外の表現が思いつかなかった。四本かそれ以上の足で歩いているはずだが、見えているのは前側の二本だけだった。そこから後ろは霧の向こうにあって見えない。左の足には軽乗用車ほどもある蹄があり、もう片方はニワトリのそれに似た長い指があった。

はるか高みにある頭は、もはや生物の体を成していない。小山のような盛り上がりの上に、それぞれが車ほどもある獣の頭蓋骨が、でたらめな方向を向いていくつも埋まっていた。

「ありえねえ……」

ジーマがうめいた。誰も言葉を発表されなかった。

手前を掃射し続けていたMi-35が戻ってきた。そいつの頭に機関砲をひとしきり放ったが、岩に石ころを投げた時と大差がない。巨像は何一つ気にする様子もなく、地響きを立てながらユーリたちの方に迫ってくる。

ヘリのパイロットはすぐに武器を切り替え、ロケット弾を2発撃ち込んだ。火花を吹く細長いロケットが突き刺さり、爆発と共に頭の一部を削り取ったように見えた。だが、1発撃ったところで掃射が止まった。弾切れかとユーリが思った時、規則正しかったヘリのローター音に乱れが生じた。回転数が下がり、弱弱しくなっていく。頭上に見えていたヘリの細長い機影が、バランスを失って回転し始めた。

急激に高度が下がり、ヘリは地面に叩きつけられた。褐色の迷彩柄に塗られた機体がバウンドし、ローターブレードがバラバラ

になって弾け飛ぶ。ブレード、テールローター、スタブウィングなど、あらゆる付属物を失いながら転がった攻撃ヘリは、瞬く間に無力な鉄くずとなっていた。

戦車が全力で同じ個所へと砲弾を撃ち込むが、巨像の歩みは止まらない。優雅ささえ伴っている。ユーリはその背後に、同じぐらいの大きさを持つ影を認めた。あれと同じだけの物がまだいる。

第3分隊を蹂躪している化け物たちの一体が、ユーリたちの方に視線を——視覚があるかはわからないが、少なくとも注意を——向けたのが分かった。あらかた食い尽くした獲物を放り出し、勢い込んで走ってくる。

「ジーマ、ヴァシリ、少尉を中に入れろ！」

ユーリは手榴弾を、第3分隊の残骸が転がる場所へと投げつけた。誰かが生きているかどうかは、もう関係なかった。真っ先に突っ込んでくる小さい連中へとAKの射撃を集中させる。動きを止めるために、足を狙い、倒れるとすぐに狙いを変えて撃ち続けた。

「ユーリ、早く来い！ デイミトリ、ヴァディム、援護してやってくれ！」

ユーリは振り向いた。ヴァシリとジーマが少尉を引きずり、BMPのドアから中に押し込むところだった。デイミトリら機関銃チームが援護射撃を開始すると同時に、ユーリは彼らの方へと全力で走った。

足をかじられることなくたどり着いて、デイミトリの肩を叩いてドアから中に飛び込む。続いてデイミトリとヴァディムが中に入った。

「入ったか？ 全員入ったか？」

セルゲイが後ろを振り返って言った。ドアの向こうでは、上から降ってきた巨大な蹄が、戦車の上に振り下ろされる様子が見えた。もっとも装甲が薄い箇所へと、巨大な岩が振ってくるような物だった。一度では破壊されなかったが、巨像はそれを理解しているかのように

「入りました！ ヴァディム、ドアを閉めろ！」

ヴァディムが開いたままのドアに飛びついてレバーに手をかけた時、何かが上から降りてきて、ヴァディムの右腕ごとドアを挟み込んだ。

金属がひしゃげる音と骨が碎ける音に、ヴァディムの絶叫が合わさった。

「何だ！」

「ヴァディムが捕まった！」

「おい、アントン。まだ出さな！ 車を動かすな！」

「ヴァディムを押さえろ。外に引きずり出されるぞ」

ユーリはAKを手に、戸口から外を見た。第3小隊を食い散らかした、あの双頭のヒヨコもどきが、片方の頭でドアごとヴァディムの腕を啜えこんでいた。重機関銃の弾にも耐える装甲ドアはプレス加工されているかの如く折り曲げられている。巻き込まれたヴァディムの右腕は骨が砕け、残った筋肉組織だけでつながっているような有様になっている。血が噴き出し、かつてドアだった鉄の板は真っ赤に染まっていた。

ヒヨコがくちばしを引っ張った。ドアの蝶番の一つが外れ、ヴァディムの体が外に引きずられた。ヴァディムの悲鳴がさらに高く

なり、金属がきしむ音と筋繊維がちぎれる音と混ざり合って、狭い兵員室で反響する。

ユーリは持ち主を道連れにしようとしているヴァディムの右腕に目をやった。もう役目をはたしていない。

挟まれて断裂しかけている位置のすぐ後ろ、肘の少し先にAKの銃口を押し当てた。跳弾が外に飛ぶように角度を調節してフルオートで引き金を絞り、ヴァディムの右腕をちぎり飛ばした。

それまでを超える絶叫がヴァディムの口からほとぼしり、体が兵員室の方へと引きずり戻される。噴き出した血がユーリのズボンに赤のまだら模様染めた。

その直後に、大きな音と共にドアがちぎり取られていった。装甲ドアが失われ、ドアのあった場所はただの穴になっていた。

ヒヨコは口にした獲物を破壊している。その向こうでは、巨像が戦車を踏み付け、鉄くずへと変えていた。

「ヴァディムを奥に入れろ！」

ユーリは叫び、自分も開いたままの入り口から可能な限りの距離を取った。

「アントン、出せ！ 退避だ」

セルゲイが怒鳴った。

「どこに行けばいいんだ！」

それでも、化け物の体や踞尾象の足がない方向へとハンドルを回そうと格闘している。

「東だ。施設から距離を取れ。大隊本部に……」

どこまで言ったとき、横からの強烈極まりない衝撃が走り乗っている全員を壁や床に叩きつけた。

「レフ、何してやる？ 撃て、とにかく撃て！」

「武器システムがオフラインになった。砲塔も回せん。さっきからシステムがおかしいんだ！」

セルゲイが言い終える間もなく、再び衝撃がBMPを襲った。今度は車体が横滑りを起こした。車がどこを向いているのか、ユーリにはもうわからなくなっていた。

「どっちに向かってるんだ？ そっちは……」

「ステアリングもダメだ！ 方向転換できない」

怒鳴り合うセルゲイやアントンの声を聞きながら、ユーリはドア枠の向こうで何体もの化物が近づいてくるのを見た。

「後ろはダメだ。追いかけてきてるぞ！」

ユーリの言葉を聞いたアントンが、呪いのうめき声を上げた。ド畜生が！ との言葉と共に、前方へと急加速する。

犬や猫のように逃げる物を追いかける本能を備えているのか、後ろから迫ってきた化物たちは勢い込んで追跡を始めた。それでも、雪の中では履帯で走る車の方に分があった。それらの姿は霧の中に消え、追いかけてくる気配はなくなったように思えた。

そいつらの姿が消えてもなお、危機を脱したという感覚は、ユーリの中には湧いてこなかった。BMPの向かっている先が西——化物どもがやってきた側、研究施設のある方角だった。

喫茶店文芸 2021 年 12 月号

サイト URL

<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>

監修 マサユキ・マサオ

編集 氷川省吾

